2022年度日本語教育学会 学会賞 受賞コメント

池田 玲子（昭和女子大学・特命教授）

この度、学会賞受賞のお知らせを受けたとき、私はただただ嬉しかったです。大学を定年退職後にこのような栄誉にあずかるとは、夢にも思っておりませんでした。今年、私は仕事に関して二つ目の大きな贈り物をいただいた気がします。一つ目は、自分の故郷で定年退職を迎えられたこと、そして再び東京に戻って日本語教育の研究者育成の仕事に就けたことです。そして、二つ目がこの学会賞です。ただ、この受賞は私個人に与えられたものではなく、これまで私と共に教育実践研究に取り組んでくれた協働実践研究メンバーに頂けたものだと思うのです。そう思うと、感激もひとしおです。

20数年前の私は、修士課程修了直後に「協働学習／ピア・レスポンス」の論文を初めて日本語教育学会の学会誌に投稿しました。かなり手厳しいコメント付きで不採択の結果が返送されてきたのを思い出します。しかし、その後は後輩や他の研究者から協働学習の論文が次々と発表され、協働学習（ピア・ラーニング）は徐々に周知され、おかげで、その後は私も日本語教育学会の教師研修委員会委員として、国内の現場に向けて協働学習を発信することができました。また、仲間たちと一緒に設立した「協働実践研究会」の活動を通じて、国内の実践者や研究者、その関係者たちとも研究に取り組むようになりました。次の段階には、この協働実践研究を海外の教育現場で日々奮闘されている日本語教育関係者たちとも共有したいと思うようになりました。協働的な学びへの転換の課題は、すでに世界的な教育改革の潮流となっています。ならば、限られた情報しかない様々な環境にいる海外の日本語教師たちにこそ、私たちが取り組んできた協働実践研究の共有化を、こちらかアプローチしていく必要があると考えました。ここ数年は、海外の日本語教育現場に向けて、とくに日本語学習者を多く抱えるアジア諸地域での研究活動に力を入れ、協働実践研究のための海外拠点づくりを行ってきました。

今、こうした研究活動を振り返ってみると、そこには常に私が心から尊敬し、信頼する仲間の姿があります。私は彼らとうまく協働できたからこそ今まで研究をつづけることができたのです。日本語教育に協働の意義を唱えてきた私もチームメンバーたちも、この受賞は、協働することで生み出される「価値創造」の証だと解釈したいです。

コロナ禍は世界中の人々に様々な困難をもたらしました。私も皆様と同様に仕事上の困難を多く経験しました。さらに、私生活でも夫を亡くし、まもなく愛犬にも死なれ、一時は意気消沈しておりました。苦しい時間のあとに、このような嬉しい知らせがやってくるとは・・・。本当にありがたい思いでいっぱいです。

日本語教育学会の皆様、とくにこの選考にかかわってくださった委員の方々に心より感謝申し上げます。私の場合、実践や研究にかける残り時間が少ない身なのかもしれませんが、それでもこの賞を糧に、日本語教育に貢献できるよう精進してまいります。

2022年度日本語教育学会 奨励賞 受賞コメント

南浦 涼介（広島大学・准教授）

２つの「弱さ」が僕にはありました。

僕はもともと、小学校の先生になりたいと思っており、日本語教育とはまったく縁のない教員養成の大学生でした。でも2000年代初頭、就職氷河期の時代でもあり、また時代のせいではなく単に自分の勉強のオサボリもあいまって教員採用試験は失敗し、その後在学中の縁でタイで日本語教師をすることになりました。そうしたことから、僕は日本語教育の専門性はほとんどないままにこの世界に飛び込むことになりました。そんな僕に、同僚の先輩は、ほとんど何も知らない僕に、日本語教育の視点をアカデミックな俯瞰的な視点から教えてくれ、教育実践を向上させていくのに、研究や理論の視点が大きな役に立つことを教えてくれ、初めて「研究的な視点」の面白さに気づかせてくれました。それが大学院をめざすことになったきっかけです。日本に戻って外国につながる子どもの日本語指導の仕事をしていたときに、この世界は学校教育と日本語教育をどちらにも関わっていたからできることだ、と天啓を得ました。ただ、素直に日本語教育を専門に選べば話はシンプルだったのかもしれませんが、もともとの自分の専攻と「教員になりたかったのにまだなれていない」ことから学校教育・教科教育のコースに入り、日本語教育も学ぶという方法を採りました。この決断が冒頭の２つの「弱さ」につながっています。

１つめの弱さは、つねに研究や学問のディシプリンの間で揺れたことです。経験科学・実証科学が中心の日本語教育学の系譜と、規範科学が中心の教育学の系譜の間でディシプリンを使い分けたり、他者に対してディシプリンを説明したり、拠って立つ方法の弱点を突きつけられたりということと常に向き合うことになり、それにおっかなびっくりの日々を送ることになってしまいました。２つめに、独立的に研究者として歩んでいくときも卒業した場所の人間関係に頼ることができず、１人で、あるいは自分自身が率先をして何かを進めなければならないことが多くできてしまいました。恥ずかしながら、そうしたことから人をみて羨ましいと思ったこともあります。

改めて今回奨励賞として評価をいただいた内容を見てみると、ああこれはそうした悩みや孤独さから生まれてきたものだなあと改めて思うことがあります。と同時に、そうしたある種のルサンチマンの側面があったにもかかわらず、改めて周りには実はたくさんの人がいたのだな、ということにも気づかされました。ああ、しょうもないことに拘っていたなあと。

気がつけば僕は「外国人児童生徒の教育を学校教育全体から捉える仕事」ができる場所にいます。自分の現場である学生たち、学校の子どもたちや現場の先生方も解放していくことができるかどうかが次のステージの自分には問われているなと思います。「自分の弱さを知る」ことは諸刃の剣です。弱さをルサンチマンに変えるのではなく、それを自覚しつつ人の痛みを想起することに、そして共に友として歩む資源にしていくことに向かう成熟さに変えられるかどうか。そうあれよと、みなさまにそれを奨励されているのだと改めて思っています。感謝いたします。

2022 年度日本語教育学会 功労賞
故・奥田純子氏の受賞に寄せて

堀井 惠子（武蔵野大学・名誉教授）

2022 年 4 月 13 日、奥田純子さんが永眠されました。早すぎる永眠でしたが、奥田さんが生前に話していた言葉と、8 月に開かれた「故奥田純子さんを偲ぶ会」に集った多彩な方々のお話を想い出しながら、彼女がなしたことを紡いで、受賞を称えられたらと思います。

奥田さんは、1970 年から日本語教育に携わり、半世紀にわたり日本語教育界を力強く支えてきました。1988 年に「コミュニカ学院」を設立していますが、ラテン語の「コミュニカティオ：わかち合い」を教育理念とし異文化間教育を根底においた学校では、多様な国・地域からの留学生、ビジネスパーソンや日本人社員、短期の語学学習者などが学びあっています。

日本語教育振興協会には、1989 年の設立当初から関わり、「日本語学校」の質の向上のためにプロジェクトを立ち上げ活動、手がけた教員研修は 2018 年からの文化庁委託「日本語教育人材の養成・研修プログラム」の運営につながっています。

日本語教育学会においても、理事として在任していましたが、2015 年にチャレンジ支援事業を立ち上げた際には、異なる背景や考えをもつ先生方と共に、強いリーダーシップのもと、新規事業をけん引、今日に至る事業として育てました。

就労日本語の分野では、2010 年のビジネス日本語研究会設立時より運営に関わり、その後、代表幹事として 2020 年度からの文化庁委託「就労者に対する日本語教師【初任】研修」の企画にも尽力、さらに、アジア人材還流学会の設立・運営の中心的役割も果たしました。

阪神淡路大震災では被災した家族や教職員を支えつつ、被災留学生の支援活動に取り組み、その後も地域とのつながりを深めています。2020 年からのコロナ禍等による留学生や日本語教育機関の困難な状況に際しては、奥田さんの先導により政府への働きかけのために組織が作られ、大きな動きが生まれました。日本語教育推進法の施行実現にも大きな力を出されたことは記憶に新しいことと思います。

まだまだ書ききれないほど、奥田さんは、一人の人間としてはあまりある広範囲のことをなしつづけてきましたが、実は、2017 年に病の宣告を受けていました。しかし、「フツーに仕事をしていきたい」と外部には告げず、凛として、できる限りのことに力を尽くしていました。治療の副作用の中、入院中のベッドから政府への陳情書を書いていたこともありました。

自ら「わかち合い」を実践、関わる人々を常に明るく前向きにしてきた奥田さん。豊かな知性、感性を備えもち、強い信念で社会と対峙しながら、他者への愛にあふれる姿は「人間」を超えていたのかもしれません。悲しみは尽きませんが、残されたものとして、少しでも、その遺志をつなげていきたいと思います。

永眠の日が奇しくも結婚記念日であったとご主人が語っていましたが、ご両親の介護も立派に終えてからの最期でした。

日本語教育界、そして社会と周りの人々に奥田さんのなしたことを想い、あらためて、受賞を称えたいと思います。

2022年度『日本語教育』論文賞 受賞コメント

牧 彩花（東京外国語大学・特任助教）

この度は、日本語教育学会論文賞をいただきまして大変光栄に存じます。自分が面白いと思って取り組んだことを他の方々にも共感していただけることは大変嬉しく、有難いことだと思います。選考委員の先生方、拙論を読んでくださった方々には感謝の気持ちでいっぱいです。この場を借りてお礼を申し上げます。

今回、賞をいただきました論文は、日本語学習者が多用・誤用していると考えられる「人々」という語について、その語義と用法を考察し、人称表現における複数性、不定性は発話者の心的態度と強い関連があることを指摘したものです。

本研究のきっかけは、フランス語の不定人称表現 « on » への関心でした。というのも、私はもともとフランス語学の出身で、大学院では日本語とフランス語の対照研究をしておりました。フランス語話者がよく使うこの « on » という語は、「私達」にもなれば、「人間」「人々」にもなり、時には「あなた」をも指し示す便利な人称表現です。« on » の対応語として、どのような日本語が使用されるのかをインタビュー調査をもとに分析すると、「人々」という語が多用・誤用されていることが気になりました。そして、日本語を教えていく中で、それがフランス語話者だけの問題ではないということに思い至り、日本語学習者の使う「人々」への違和感を解明したいという思いから、いつの間にか、「人々」の語義、用法に焦点を当てた研究となりました。

拙論では扱いきれませんでしたが、「人々」の多用・誤用については、学習者の母語からの影響も大きいと思います。口頭発表の際、先生方からコメントを頂いたのですが、例えばインドネシア語、マレー語では、「人々」のような日本語の畳語と同様に、繰り返しによって複数を表す語が多く存在するようです。このような漠然とした関心から、今年度はマレー語の勉強を始めてみました（インドネシア語ではなくマレー語を選んだ深い意味はありませんが、なんとなくマレーシアに心惹かれて…）。日本語同様、人称代名詞が多種多様に存在する点も興味深いです。まだ始めて数か月なので、言語学習の初期段階の未知の単語に溺れているような状況ですが、新たな言語の視点をもつことが研究に新しい発見を与えてくれるのではないかと期待しています。

今回、学会発表、論文投稿を通じて、日本語教育学の魅力は、その研究領域の多様な広がりにあると、改めて実感しました。大会での発表を拝聴すると、教育学的なものから言語学的なもの、社会学的なものまで、研究テーマは非常に多岐にわたっています。さらに、学習者の母語も様々ですので、他言語への無限の広がりに満ちています。フランス語から始まった本研究ですが、筆者の母語である日本語に立ち返った研究に形を変え、さらに今は、学習者の母語となる他言語へと関心が向いております。多種多様な研究の中で、拙論を評価してくださった学会に改めて感謝をし、今後、日本語教育を通して様々な言語、研究領域に触れ、複眼的な視点をもち、さらに自分の研究を発展させていきたいと思います。

2022年度日本語教育学会 学会活動貢献賞 受賞コメント

小柳 かおる（上智大学・教授）

この度、2022年度の学会活動貢献賞を受賞いたしました。受賞者を代表して日本語教育学会に御礼申し上げます。日本語教育学会から通知をいただいた時は、「学会活動貢献賞」というのがピンと来なくて、一体何のことだろうという思いが先に立ちました。コロナ禍もあって、学会や研究会で他校の先生方に直接お目にかかる機会がめっきり減り、ここ数年は、学会活動をしていたという実感もありませんでした。このたびの学会活動貢献賞は、学会誌委員だった期間を除き、副査として学会誌の査読に携わった期間が10年以上、また一定数の査読を行なった者に与えられるとのことでした。学内外の業務に追われている時には、査読伺いの調査に「不可」と回答したことも多かったような気がしておりましたので、査読を対象に選んでいただいたことにも驚きました。しかし、これも長く続けていれば査読件数も自ずと蓄積された結果だと、感慨深かったです。

私は2009年から2013年にかけて学会誌委員を務めましたが、その前の2005年から2009年は査読協力者でした。これは今でいう審査・運営協力員に相当するものです。学会誌委員会で他の委員の先生方から教わったことは多々あり、委員会の議論の中で、査読のあり方について色々考えさせられました。その後、2016年より再び審査・運営協力員になり副査として査読に関わるようになってからは、委員時代の経験を活かし、それまで以上に注意を払い査読をするようになりました。例えば、投稿者のデータを生かしてなんとか修正できないか、また、論文の内容を評価できないと思った場合でも、それは研究の立場が自分と反対だからそう思うのではないか、質的か量的かなど研究のアプローチが異なるから主張に賛成できないのではないかと、結論を出す前に自問自答するようになりました。

昨今は、学会誌の論文タイトルを見ても分野は多岐にわたっており、投稿者は様々な研究の立場をとる査読者を説得できる論文を書かなくてはならず、投稿者の論文を執筆する労力には頭が下がります。学会誌の査読はピアレビュー、つまり研究者が研究仲間として相互に研究成果を評価し、研究の質を高める営みだと思っています。今後も生産的かつ健全な査読文化が醸成されることを願ってやみません。私自身は、2023年度7月より再び学会誌委員会で主査担当委員を務めることになりました。日本語教育学会に微力ながら貢献できたらと思っています。